

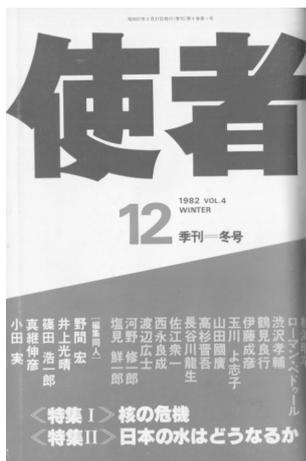
『明日』はどのように読まれてきたか？

中野和典

一 自作解説とどのように向き合うか——過去の「再現」と未来の「展望」

井上光晴『明日』——一九四五年八月八日・長崎』は一九八二年二月に発行された「使者」第二二号（最終号）に発表された⁽¹⁾。

楠田剛士が『明日』は、戦争末期の平凡な日常生活の細部を描いたことや、原爆投下の前日を再現することで核時代の「今日」を描くという着想などが評価のポイントであったが、それらは井上光晴が単行本の「あとがき」で述べていたことでもあった⁽²⁾と



初出誌表紙

指摘した通り⁽³⁾、『明日』の読み方の大きな枠組みを作っているのは〈私は可能な限りありのままの八月八日を再現しようとした〉、〈一九四五年八月八日の長崎は、



初出冒頭部

重さが、最大限に浮き彫りにされている〉（松本健一・一九八四）⁽⁵⁾、〈亡ぼされるのは人類そのものであるという視点から、つまり一九四五年八月六日、九日に起こったことは

一九八二年の今日、一九八八年八月八日の「明日」にそのまま通じる〉という井上光晴による自作解説（あとがき）である⁽³⁾。このような枠組みに従う形で、〈井上光晴の意図が八月九日の「ナガサキ」の前日である八月八日を描き、そこに熱核戦争四分前の現在をオーバラップさせるところに存在する以上、私たちは否応なく三十数年前とそれ以後の〈ナガサキ・八月九日〉を想定してこの小説を読まざるを得なくなるという仕掛けになっているのである。ここにこの『明日』という作品の特徴と最大の面白さがある〉（黒古一夫・一九八三）⁽⁴⁾、〈こういった抒情詩のような記述によって、戦時下にあつてはごく平凡な時間を生きてきた人間



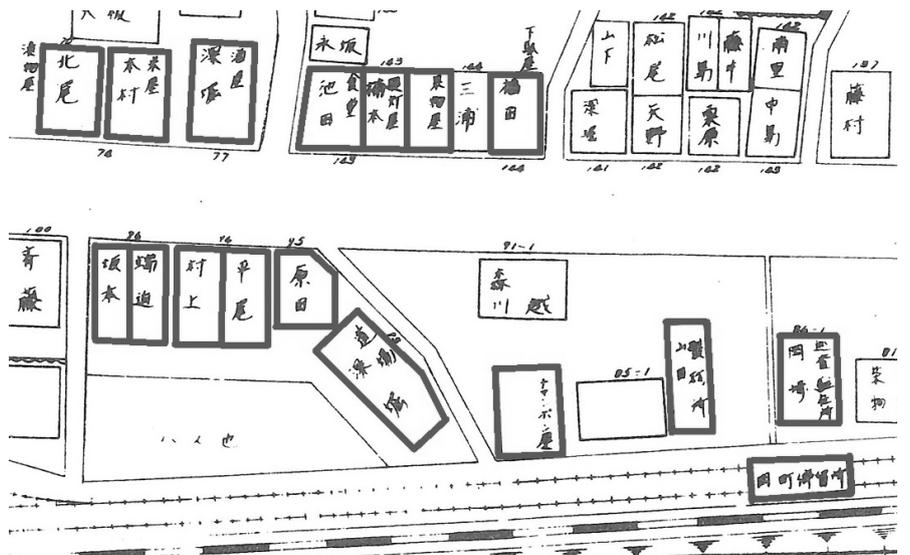
初版書影

四十年前のことではなくて、
 未来のことであるというふう
 うにとらえる視点、これが
 これから原爆文学に出てこ
 なくてはならないし、井上
 光晴の「明日」はやはりそ
 ういう意味では一つの新し

い試みだという気がする(中野孝次・一九八五)⁶⁾、(戦争末期の
 一日の光景を非常によく出現させている)(秋山駿・一九八六)⁷⁾
 といった解釈が示されてきた。いかに長崎原爆の前日(過去)を
 再現するか、その再現からいかに一九八二年以降の明日(未来)
 を展望するか、ということが『明日』を読むときの枠組みとして
 働いてきたのである。

長崎原爆の前日(過去)の再現については、井上光晴が自作解
 説において「爆心地町域」のひとつである岡町の市電停留所前
 には巡查駐在所と製材所が並び、物置の隣りに閉じたチャンポン
 屋があった。さらに深堀道場に面した小路を上がると、原田、平
 尾、村上、端迫、坂本の表札を掲げた家が軒を接し、街道を挟ん
 で北尾漬物屋、木村米屋、深堀酒屋、池田食堂、楠本提灯屋、果
 物店、下駄屋などの看板がかかっていた」などと語っており、こ
 の記述は長崎国際文化会館が発行していた「被災地復元図」(一
 九七五)と一致している⁸⁾。楠田剛士は『明日』のエピグラフや
 本文や「あとがき」で直接的に引用されている「長崎の証言・5」
 (一九七三)・「長崎の証言 1971」(一九七一)・「忘れな草第
 三号」(一九七〇)・『長崎原爆戦災史(正しくは『長崎原爆戦災

誌』——中野注)
 第二巻』(一九
 七九)と、井
 上が参照した
 と推察される
 「被災地復元
 図」(一九七五)
 などを調査し
 た上で、(井上
 による資料の
 選択も、著者
 や手記が重な
 り合っていてい
 一九七〇年代
 前半の復元運
 動の文脈にお
 いて理解され
 るだろう)と



「被災地復元図」(「岡町」部分・中野加工)

『原爆被災復元調査事業報告書(別冊)昭和45年度—昭和49年度』
 (長崎市長崎国際文化会館、1975・3)

指摘し、『明日』と長崎における爆心地復元運動(被爆前の状況の
 調査運動)との関係の深さを実証的に示している。そして楠田は
 両者の関係について(井上が広島・長崎の運動の方法に倣ったと
 いうよりも、爆心地復元の試みにおいて)は「一人一人」に、
 「一軒一軒」に執着しなければならない」という(方法が必然的
 に引き寄せられる)のであり、(小説の下敷きという接点以上に、
 こうした「再現」への態度の強度において通底するのである)と

論じ、再現（復元）という方法が伝播したというよりは一致したのだという見方を示している⁽⁹⁾。

一九八二年以降の明日（未来）の展望については、一九八六年に『明日』が文庫化される際に、井上自身が〈九州西域の原子力発電所を主題にした小説を書き進めていく途中、チエルノブイリ原発の事故が伝えられて、私のペンは全く動かなくなつた〉、〈うたがいもなく、今この現在、人間の立っている場所がそこには明示されている〉（井上光晴・一九八六）と「あとがき」に書き加えることによつて⁽¹⁰⁾、『明日』に描いた長崎原爆の前日を核戦争の前日だけでなく、原発事故の前日に接続している。このような加筆は一九八六年四月に〈チエルノブイリ原爆の事故〉が起こり、同年七月に『明日』が集英社文庫として再刊され、同年七月と八月に井上が〈九州西域の原子力発電所を主題にした小説〉『西海原子力発電所』を「文學界」に発表するという出来事の連なりの中で生まれたものである。二〇一一年の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故を経てからは〈絶望的なまでの福島原発大事故が発生した現在、再版された「明日」は三度目の重すぎる意義を帯びた〉（秋沢陽吉・二〇一五）⁽¹¹⁾、〈たとえ核戦争が起きなくとも原発事故は起きる。われわれは日々薄氷を踏んで生きている、と言つてもいいだろう。要するに、「明日」はわが身なのである〉（河村義人・二〇一八）⁽¹²⁾といった論が書かれるようになっていく。井上は長崎原爆の前日を核戦争だけでなく、原発事故の前日に接続していたが、このうち原発事故については、もはや前日（過去）の話ではなくなつてしまったことが『明日』の読まれ方にも反映されている。

二 本文と典拠の関係をどのように考えるか——第9章における破調をめぐる議論

『明日』の9章において、突然、小説の素材であつたはずの証言や書簡が、直接的に引用されていることについては、〈小説として『明日』を読んできた私はこのことに対し違和感をもつた〉（羽原譲・一九八二）⁽¹³⁾、〈違和感があつた〉（中野孝次・一九八二）⁽¹⁴⁾、〈この章に変調、違和感を私は抱く〉（渡辺澄子・一九八二）⁽¹⁵⁾といった形で、発表当時から疑問視されてきた。このような破調（9章になつて、小説中に何の断りもなく、証言等が引用されるという書き方の不統一）が生まれた理由については、羽原譲は〈原爆投下の真実のまゝに、一切の虚構が、小説が、言葉が空しく吹き飛んだのではないか〉と推測している⁽¹⁶⁾。スリアノ・マヌエラも〈挿入された被爆者の三つの証言はフィクションをフィクションで無くし、小説では語ることでできない事実を描き出す〉⁽¹⁷⁾として小説の限界と事実の強度の高さを示したものと論じている。

このような小説の限界を見る解釈に対して、楠田剛士は9章において引用された〈二つの手紙〉を〈八月八日までの実際の出来事を裏付ける資料にとどまらず、「手紙」にまつわる挿話群を綴じ合わせる機能を持つもの〉として、他の章に描かれる手紙群と照応関係を持つものと位置づけ、〈「事実」の資料に依拠しつつも、井上は「小説」という「フィクション」でしか「語ることでできない」ものを探ろうとしている〉のだと反論している⁽¹⁸⁾。また、楠田は『明日』のエピグラフでは〈霧のごとくに消されて〉しま

つたのが〈父や母〉と記されているが、引用元では〈父や妹〉であったことなど、『明日』において〈典拠との字句のわずかな異同〉が見られることも指摘しており⁽¹⁹⁾、これを改変と見るか、誤記と見るかという問題があることも指摘している。

このように『明日』とその典拠の關係については、引用方法の不統一や引用元との不一致を作品の瑕疵（欠点）と見るか、ひとつの表現技法と見るかで見解が分かれている。この問題は『明日』が証言や手紙を引用しつつ、どのように構成されているかを見たと上で判断する必要があるだろう。

三 構成をどう読むか——カウントアップの時間感覚とその破壊

川西政明が（一九四五年八月六日をむかえる前々日までを描いた「壊滅の序曲」の滅亡観が井上光晴の「明日——一九四五年八月八日・長崎」をうつす一つの鏡である）と指摘し⁽²⁰⁾、楠田剛士も〈長崎の「壊滅の序曲」を思わせる仕掛け〉であると指摘した通り⁽²¹⁾、そもそも原爆が投下される直前の人々のありさまを再現すること自体は、原民喜「夏の花」三部作のひとつであり、〈原爆弾がこの街を訪れるまでには、まだ四十時間あまりあった〉と結ばれている「壊滅の序曲」（『近代文学』一九四九・一）ですでに試みられていたことであった。一九七九年五月に発行された「使者」第一号の巻末（奥付の上）には〈小説／一九四五年八月七日／井上光晴〉という「次号予告」が掲載されており、これを見ると、井上光晴が広島原爆の二日前までを描いた原民喜「壊滅の序曲」のように、長崎原爆の二日前にあたる八月七日を小説として

<p>★「使者」第2号は七月十五日頃発売です</p> <p>芸術・政治・自由 <small>韓国作曲家・在ベルリン 尹 伊桑</small></p>	<p>次号予告</p> <p>文学評論 中村真一郎</p> <p>野間宏インタビュー(2) <small>小説一九四五年八月七日 井上光晴</small></p> <p>天皇制文化と賤民文化 <small>「聖」と「賤」の日本文化史― <small>桃山学院大学教授 沖浦 和光</small></small></p> <p>＜強力三大連載＞ 細く峻しい道 真継 伸彦 竹取と浮雲 篠田浩一郎 土 漠 小田 実</p>
---	---

「使者」第1号（1979・5）巻末「小説／一九四五年八月七日／井上光晴」と次号の予告がなされている

構成になっっているのに対して、『明日』が多くの登場人物たちにとつての一九四五年八月八日のありさまをさまざまに描きながら1～9章をカウントアップして、突然、八月九日の朝に辿り着く章を0章として終わらせる時間構成になっていることは大きな違いであると言える。

『明日』の時間構成について、野崎富久美は〈未来を予測する能力を持たぬが故に、時間の連続性を頼みに生き続けるしかない人間の姿〉を描き、〈未来に対して全く無力な人間に立ち塞がっている「明日」の不気味さを、作品の向こうに提示したその視点の大きさと方法こそが、この作品が持つ独自性なのだ〉と論じている⁽²²⁾。また、スリアノ・マヌエラは〈最終章は序列に従わず、

描く構想があつた可能性を指摘できる。一方、両者の違いについては、描いている場所（広島と長崎）や登場人物の数などが挙げられるが、「壊滅の序曲」が一九四五年の三月頃から八月四日までをほぼ時系列に描き、「夏の花」三部作として見れば、「夏の花」（被爆の直後）↓「廃虚から」（避難した後）↓「壊滅の序曲」（被爆の直前）という時間

10ではなくゼロとなっている。このゼロというのは自然な発展を砕く、無にする、破壊するという意味を持っているのであろう。あるいは、爆心地を表すグラウンドゼロからとっているのかもしれない」と論じている。⁽²³⁾ いずれも『明日』の時間構成が1〜9章までのカウントアップによって連続的（日常的）な時間感覚を描いた上で、突然0章で終わらせることによってその時間感覚の破壊を示すものになっていることを指摘していることになるだろう。

ただし、「二」で見た通り、『明日』の小説としての破調は9章の時点で起こっていると言うこともできる。1〜8章と9章の関係という問題と、1〜9章と0章の関係という問題は、現時点では別々に論じられているが、1〜9章が三人称視点、0章のみが一人称視点で語られていることも含めて、これらを総合的に関連づけて『明日』の構成を捉えることが、残された課題であると言える。

四 「再現」の死角をどう読むか——外国人の「不在」

『明日』が書かれた同時代的な背景には、一九八二年一月に出された「核戦争の危機を訴える文学者の声明」もあった。井上光晴はこの声明の中心人物ではないが、署名者として名を連ねている。秋沢陽吉は〈季刊誌『使者』最終号は「核の危機」を特集して応じ、野間宏が「終刊の言葉」を記した。人類生存の危機について文学者の声明と共有し、この危機にいかにして真の文学創造をすすめて行くべきか、と。創刊号で予告してから三年「明日」

は最終号に間に合った」と『明日』と声明との関係を整理している。⁽²⁴⁾

この「核戦争の危機を訴える文学者の声明」の中心人物たちが編集世話人となって、一九八三年八月にほるぷ出版から『日本の原爆文学』全一五巻が刊行され、その第五巻『日本の原爆文学』井上光晴』に『明日』も収録されることになる。『日本の原爆文学』の編集世話人のひとりである鎌田定夫は『明日』には書かれていませんが、ここ（『明日』にも描かれている浦上刑務所——中野注）には、中国人三十三人、朝鮮人十三人が囚われており、日本人の収監者三十三人とともに爆死してゐるのであり、〈爆心地から約一マイル（一・六キロ）ほどのところに（略）二百人前後の連合軍捕虜もいたことなどを指摘し、『明日』の中に描かれた原爆前日の長崎〉とは、〈戦争を遂行し他民族を抑圧する構造をもっていた〉として、⁽²⁵⁾『明日』を肯定的に評価しながらも、そこにいたはずの外国人たちの姿が捨象されてしまっていることを指摘している。

確かに、『明日』には〈巨済島から連行されてきた「半島人」の仲間がああやって毎晩集まっているらしい〉（第9章）といった形でしか外国人の姿は描かれておらず、ほとんど再現の対象から外されてしまっていると言わざるをえない。先行研究においても『明日』における噂話の働きに注目した楠田剛士が〈噂話やデマには、広島に落とされた「新型爆弾」のほか、召集、出征、配給、疎開、米軍上陸、強制連行の朝鮮人に関するものがある〉と指摘するに留まっている。⁽²⁶⁾

この再現の空白を補うように、映画『TOMORROW 明日』（一

九八八)では、長崎で差別的な取り扱いを受けている朝鮮人や連合軍捕虜たちの姿を描いた挿^{エピソード}話^トが新たに追加されている。埴谷雄高は『明日』が映画化されたことについて〈満足しない〉、〈井上はテレビとか映画になるといことは、俗化するというふうにとらなければいけないんだ〉と痛烈に批判したが⁽²⁷⁾、『明日』の映画化は単に〈俗化〉として切り捨てられないものもあるのではないか。小説『明日』とその映画化、テレビドラマ化、舞台化をどのように関係づけるか、ということも残された課題である。

注

- 1 初出は「使者」一二号(一九八二・二)。初版は『明日——一九四五年八月八日・長崎』(集英社、一九八二・五)。そのあと『日本の原爆文学』⑤ 井上光晴』(ほるぷ出版、一九八三・八)、『井上光晴長篇小説全集14』(福武書店、一九八四・五)、『明日——一九四五年八月八日・長崎』(集英社文庫、一九八六・七)、『昭和文学全集第22巻』(小学館、一九八八・七)、『明日——一九四五年八月八日・長崎(大活字本シリーズ)』(埼玉福祉会、一九九五・一〇)に収録されている。ほかに『TOMORROW 明日』(黒木和雄監督、ヘラルド・エースⅡ日本ヘラルド映画配給、一九八八年公開)として映画化、『明日——一九四五年八月八日・長崎』(せんぼんよしこ監督、日本テレビ、一九八八年八月九日放映)としてテレビドラマ化、『明日——一九四五年八月八日・長崎』(劇団青年座、一九八九年初演)として舞台化されている。また「第二九回(昭和五八年度)全国青少年読書感想文コンクール(高校の部)」課題図書にも選定された。
- 2 楠田剛士「井上光晴『明日——一九四五年八月八日・長崎』における「再現」の問題」(『近代文学論集』二〇〇九・一一)一二二頁。
- 3 井上光晴「あとがき」(『明日——一九四五年八月八日・長崎』集英社、一九八二・五)二二二—二二四頁。
- 4 黒古一夫「原爆文学論」(『原爆とことば』三一書房、一九八三・七)九二頁。
- 5 松本健一「過去の重み」(『井上光晴ノート14』『井上光晴長篇小説全集14』福武書店、一九八四・五付録)八頁。
- 6 中野孝次・長岡弘芳「対話・原爆文学をめぐる」(『国文学解釈と鑑賞』一九八五・八)一六一—一七頁。
- 7 秋山駿「解説」(『明日——一九四五年八月八日・長崎』集英社文庫、一九八六・七)二二〇頁。
- 8 井上光晴はほかに〈前の日のことを洗いざらい調べました。気候から何からです。洗いざらいといってもなかなか難しかったんですが、あらゆる資料をずうとつなぎ合わせて行きました〉(『悪霊の時代に』(『昭和文学全集 第22巻』小学館、一九八八・七)一〇五一頁)、〈まず大橋に降りて、その地図を頼りに、店の名前を記していない余白の家にはいちいち名前を書き込むようにして、ひとつひとつ行って行きました〉(『明日』の現場」(『小説の書き方』新潮社、一九八八・八)七五頁)といった自作解説をしている。
- 9 楠田剛士「井上光晴『明日——一九四五年八月八日・長崎』における「再現」の問題」(前掲)一二七頁。
- 10 井上光晴「あとがき」(『明日——一九四五年八月八日・長崎』集英社文庫、一九八六・七)二二六頁。
- 11 秋沢陽吉「井上光晴、虚構のありか」(『労働者文学』二〇一五・

- 七) 六頁。
- 12 河村義人「戦前」の今、「反戦の書」を読む 16 林京子『祭りの場』 井上光晴『明日』(「部落解放」二〇一八・一〇) 八三頁。
- 13 羽原譲「書評 動かぬ真実 井上光晴『明日』」(「群像」一九八二・七) 二二四頁。
- 14 中野孝次・田久保英夫・高橋英夫「読書鼎談」(「文藝」一九八二・八) 二四五頁。
- 15 渡辺澄子「最近の戦争文学から」(「文学的立場(第三次)」一九八二・九) 七八―八四頁。
- 16 羽原譲「書評 動かぬ真実」(前掲) 二二五頁。
- 17 スリアノ・マヌエラ「井上光晴『明日』——一九四五年八月八日・長崎」(「大東文化大学近現代文学研究」二〇〇〇・三) 五四頁。
- 18 楠田剛士「井上光晴『明日』——一九四五年八月八日・長崎』における「再現」の問題」(前掲) 一二八頁。
- 19 楠田剛士「井上光晴『明日』——一九四五年八月八日・長崎』における「再現」の問題」(前掲) 一二八―一二九頁。
- 20 川西政明「マリヤの首——「地の群れ」「明日」論」(「文藝」一九九二・八) 二三五頁。
- 21 楠田剛士「井上光晴『明日』——一九四五年八月八日・長崎』における「再現」の問題」(前掲) 一二二頁。
- 22 野崎富久美「作品を読むということ」(「日本文学論叢」一九九三・三) 一五頁。
- 23 スリアノ・マヌエラ「井上光晴『明日』——一九四五年八月八日・長崎」(前掲) 五四頁。
- 24 秋沢陽吉「井上光晴、虚構のありか」(前掲) 六頁。
- 25 鎌田定夫「十五年戦争と原爆文学」(『反核——文学者は訴える』ほるぷ出版、一九八四・四) 二一一―二二三頁。
- 26 楠田剛士「方法としての噂話——井上光晴の原爆小説」(「叙説Ⅲ」二〇一二・六) 二八頁。楠田は「うわさ」(『原爆』)を読む文化事典『青弓社、二〇一七・九』においても(井上光晴『明日』——一九四五年八月八日・長崎)(集英社、一九八二年、三五三頁)で語られるうわさは、広島「新型爆弾」のほか、召集、出征、配給、疎開、アメリカ軍上陸、強制連行の朝鮮人など数多い」と指摘している。
- 27 埴谷雄高・瀬戸内寂聴「追悼対談 全身小説家・井上光晴」(『海燕』一九九二・八)。引用は『狼火はまだまだあがらず 井上光晴追悼文集』(影書房、一九九四・五) 二〇九頁。

『明日』——一九四五年八月日・長崎』研究文献一覽

- 【一九八〇年代】 1 羽原譲「書評 動かぬ真実 井上光晴『明日』」(「群像」一九八二・七) / 2 中野孝次・田久保英夫・高橋英夫「読書鼎談」(「文藝」一九八二・八) / 3 渡辺澄子「最近の戦争文学から」(「文学的立場(第三次)」一九八二・九) / 4 黒古一夫「原爆文学論」(『原爆とことば』三一書房、一九八三・七) / 5 夏堀正元「解説——現代の煉獄の作家・井上光晴」(『日本の原爆文学⑤井上光晴』ほるぷ出版、一九八三・八) / 6 鎌田定夫「十五年戦争と原爆文学」(『反核——文学者は訴える』ほるぷ出版、一九八四・四) / 7 竹内実「解説」(『井上光晴長篇小説全集 14』福武書店、一九八四・五) / 8 全国学校図書館協議会編『考える読書 第29回中学・高校の部』(每

日新聞社、一九八四・五)／9 中野孝次・長岡弘芳「対話・原爆文学をめぐって」(『国文学 解釈と鑑賞』一九八五・八)／10 秋山駿「解説」(『明日——一九四五年八月八日・長崎』集英社文庫、一九八六・七)／11 井上光晴「悪霊の時代に」(『昭和文学全集 第22巻』小学館、一九八八・七)／12 井上光晴『明日』の現場」(『小説の書き方』新潮社、一九八八・八) 【一九九〇年代】 13 川西政明「マリヤの首——「地の群れ」「明日」論」(『文藝』一九九二・八)／14 埴谷雄高・瀬戸内寂聴「追悼対談 全身小説家・井上光晴」(『海燕』一九九二・八)／15 野崎富久美「作品を読むということ」(『日本文学論叢』一九九三・三)／16 『狼火はいまだあがらず 井上光晴追悼文集』(影書房、一九九四・五) 【二〇〇〇年代】 17 スリアノ・マヌエラ「井上光晴『明日——一九四五年八月八日・長崎』」(『大東文化大学近現代文学研究』二〇〇〇・三)／18 黒古一夫「『原爆文学』から『核文学』へ」(『原爆は文学にどう描かれてきたか』八朔社、二〇〇五・八)／19 楠田剛士「井上光晴『明日——一九四五年八月八日・長崎』における「再現」の問題」(『近代文学論集』二〇〇九・一一) 【二〇一〇年代】 20 楠田剛士「方法としての噂話——井上光晴の原爆小説」(『叙説Ⅲ』二〇一二・六)／21 秋沢陽吉「井上光晴、虚構のありか」(『労働者文学』二〇一五・七)／22 楠田剛士「うわさ」(『原爆』を読む文化事典) 青弓社、二〇一七・九)／23 河村義人「戦前」の今、「反戦の書」を読む16 林京子『祭りの場』 井上光晴『明日』(『部落解放』二〇一八・一〇) 【二〇二〇年代】 24 田籠良太「普通の日々」が一番尊い 『明日 一九四五年八月八日・長崎』 井上光晴」(『九州の100冊』九州文化協会、二〇二〇・三)